

水産業強化支援事業事後評価報告書

			滋賀県水産試験場
政策目的		水産資源の持続的な利用・管理の推進	
政策目標		資源増養殖目標 No. 5-01	
事業実施主体		滋賀県	
実施地区名		琵琶湖	
実施期間及び目標年度		実施期間	目標年度
		令和５年度	令和５年度
交付金額		446 千円	
事業計画の内容		琵琶湖のアユ資源管理に資する餌料状況調査およびスジエビ、ゴリおよびイサザの資源動向評価に資する資源状況調査	
評価	成果目標		
	現状値	(令和５年度末時点) ①餌料状況調査（９～２月拡充調査） ６回 ②スジエビ生息状況調査 ６回 ③ゴリ生息状況調査 ３回 ④イサザ漁況予測 翌年春の漁況予測	
		(令和５年度末) ①餌料状況調査（９～２月拡充調査） ６回 ②スジエビ生息状況調査 ６回 ③ゴリ生息状況調査 ３回 ④イサザ漁況予測 翌年春の漁況予測	
	(１) 現状値の説明		①琵琶湖の重要漁業対象種であるアユの漁獲が、近年に不安定となり、漁業者のアユ資源に対する不安が増している。このため、アユ資源を支える餌の状況をより即時的に把握する必要が高まっている。本県では従前より定点定期観測でプランクトン調査を実施してきたところであるが、近年の状況を受けて、これらの調査を拡充して行う必要があり、現状値は拡充して行った調査の実施回数とした。 ②～④イサザやゴリ(ヨシノボリ類)、スジエビの資源動向を評価することは、漁業者への情報提供や資源管理の指針等の

		行政施策へ反映するために重要な事項である。漁況予測は漁業者のみならず加工業者にとっても重要であり、消費拡大にも必要な情報であることから、それらの生息状況調査や漁況予測等を行う必要がある。そのため、各魚種の現状値は、スジエビとゴリについては調査の実施回数とし、イサザについては調査結果からの翌年春の漁況予測とした。
	(2) 地域への経済効果 (ハード事業のみ)	
	(3) 資源管理の取組状況等(ハード事業のみ)	
	(4) 所見	①餌料状況調査では、9～2月の従来の各月1回の調査に加え各月2回の調査を実施することにより、アユ仔魚期の餌料状況をより詳細に把握した。 ②～③生息状況調査では、スジエビ調査を10月から3月にかけて6回実施し調査結果をHP等で公表した。ゴリ調査は7月から9月にかけて3回実施し資源動向を把握した。④イサザ漁況予測は7月の調査結果から翌年春の漁況を前年並みと予測した。
	(5) 評価機関の意見等	評価機関なし
今後の改善方向等に関する分析		餌料状況と生息状況の把握を引き続き実施する。

政策目的		水産資源の持続的な利用・管理の推進	
政策目標		資源増養殖目標 No. 5-02	
事業実施主体		滋賀県	
実施地区名		琵琶湖	
実施期間及び目標年度		実施期間	目標年度
		令和 5 年度	令和 5 年度
交付金額		465 千円	
事業計画の内容		西の湖や琵琶湖北湖等の漁場における環境状況調査およびアユ等の着臭メカニズムの解析	
評価	成果目標		
		現状値	(令和 5 年度末時点) ①西の湖等漁場環境動向モニタリング 4 回 ②アユ着臭状況の把握 3 回 ③漁場湖底の溶存酸素濃度の詳細調査 8 回
		目標値	(令和 5 年度末) ①西の湖等漁場環境動向モニタリング 4 回 ②アユ着臭状況の把握 3 回 ③漁場湖底の溶存酸素濃度の詳細調査 8 回
	(1) 現状値の説明		①および②魚類の産卵繁殖場として重要な水面である西の湖ではここ数年、アオコが常態化し、真珠母貝の成長や生残も悪化している状況にある。また、琵琶湖北湖の一部水域において漁獲されたアユにカビ臭を主体とする異臭があり、商品価値が喪失する事例もある。状況をモニタリングして原因を把握する必要があることから、現状値は調査の実施回数とした。 ③漁獲対象魚種のスジエビ等の生息場である琵琶湖沖合底層では、夏季以降に溶存酸素濃度が 2.0 mg/L 以下となる貧酸素状態が令和元年から 4 年連続で発生している。その実態把握と影響評価のため、現状値は調査の実施回数とした。
	(2) 地域への経済効果 (ハード事業のみ)		

	(3) 資源管理の取組状況等(ハード事業のみ)	
	(4) 所見	①西の湖で11月に魚類採捕調査を、12月に底質調査を、10月と2月に流速調査を実施して漁場環境の現状を確認した。 ②過去に異臭魚が確認されている西の湖において、魚類、底泥および湖水についてカビ臭原因物質の濃度を測定した。魚類、底泥および湖水からカビ臭原因物質を検出した。 ③8月から3月にかけて月1回の頻度で計8回、沖合底層の酸素状況を確認した。溶存酸素濃度は10月中旬から11月下旬にかけて貧酸素の目安となる2 mg/L未滿を示した。
	(5) 評価機関の意見等	評価機関なし
今後の改善方向等に関する分析	①引き続き漁場環境の動向を調査して現状を把握し、課題解決に資するデータ収集に努める。 ②今後は栄養塩とカビ臭の原因になる植物プランクトンの動態なども調べることで、カビ臭物質の産生や移行、蓄積経路の詳細な推定を目指したい。 ③地球温暖化により夏季から冬季における沖合底層での貧酸素化は常態化するものと思われることから、引き続き調査を継続する。	